

〔資料〕

妙幢淨慧撰『古今舍利驗論』翻刻と解題（二）

関口 静雄

〔解題〕

妙幢淨慧撰『古今舍利驗論』中巻（本末二冊）を翻刻紹介する。

上巻（全一冊）は序および十八項目にわたって、舍利の有する種々の名称とその意味・形状・色相、不懐相・破壊相について、また俗間における舍利の真偽識別法の多種多様なことについて等々、典籍・聖教はもちろん俗間における諸伝承はじめ自身見聞の具体的事例を列記している。中巻は本末二冊からなるが丁付は一通し、十九項目を収める。舍利感得の因縁、感得の瑞夢、舍利と受戒の因縁、舍利分化の不思議から始めて、舍利の類分・放光・像現・出現・隠現・往還・行住・随願・因縁・瑞夢・獲福・離癡・徐病・利益等々の不思議話譚を具体例を引きながら詳述している。下巻も本末二冊十五項目からなるが丁付は一通する。舍利と地藏にまつわる話譚が多く、加えて光明真言加持土砂・断末魔護符・曼荼羅丸護符・御衣木丸・魔障用心等々も広く舍利にまつわる事柄として取り上げている。

全巻を通覧すると、自身の見聞と衆庶のもたらしてくれた話譚が多く、それもとくに淨慧の生国近江の話譚が少なくない。ともかくも衆庶とともにあることを座右の銘として一書を編じた趣が強く、たとえば著名な鑑真請来三千粒舍利、東寺弘法大師請来舍利、鎌倉円覚寺舍利、あるいは黄檗隠元隆琦が後水尾法皇から下賜された舍利についてさえも関心を示しているののである。それが叡山義宥撰『新撰佛舍利驗傳』（文政四年（一八二二））に「枝議朶論」「閭巷無名、尼女子ノミ爾」と批判された要因であるが、義宥等の学僧とは拠って立つ処がまったく違うのである。以下に掲げる『新撰佛舍利驗傳』の人名のみで構成された目次を見れば、淨慧が本書で意図したことは明瞭であろう。

『新撰佛舍利驗傳』目次（講堂蔵版。佛敎大学図書館蔵）

- 聖徳太子・鑑真和尚・弘法大師・傳敎大師・慈覺大師・護命僧正
- 空也上人・皇慶闍梨・良峯源算・曉印法師・永觀禪師・解脱上人
- 笠森常祚・賢林戒深・安部慶圓・湛度法師・小野法廉・圓軌法師
- 報恩義空・安樂堯田・延朗上人・杜多宗敏・豪本法師・湛海上人
- 榮尊禪師・杜多大運・貞算和尚・日藏上人・光子尊者・僧正實觀
- 僧正義天・僧正等順・宣澄上人・本寂律師・無參上人・沙彌行範
- 杜多常癡・澄禪上人（巻上）
- 聖武上皇・孝謙天皇・蘇僕射馬公・源僕射實朝・源羽林義貞
- 江親通・入道生蓮・赤井甚三・樋爪俊衝・源顯家・翁和尚
- 居士仁光・中村爲一・陶村政勝・堺屋友三・居士玉翁・榎原豊敎
- 樵次郎作・醫士得庵・佛老人・信士貝岸・茶商緑意・野人孫作
- 婦人阿繁・丹生少女・地觀居士（巻下）

〔翻刻凡例〕

- 一、東洋大学図書館哲学堂文庫蔵『古今舍利驗論』三巻五冊本を底本とした。
- 一、可能な限り原文の表記を尊重し、明らかな誤刻もそのまま翻刻した。
- 一、合字は「ㄱ」（コト）のみ採り、以外は通行の表記に改めた。
- 一、「己・巳・巴」「玉・王」等の混用字体は文意をとって適字を置いた。
- 一、頭注は各話の末尾に一括して掲出した。
- 一、半丁ごとに丁数を示し、各話間に空行を置いた。